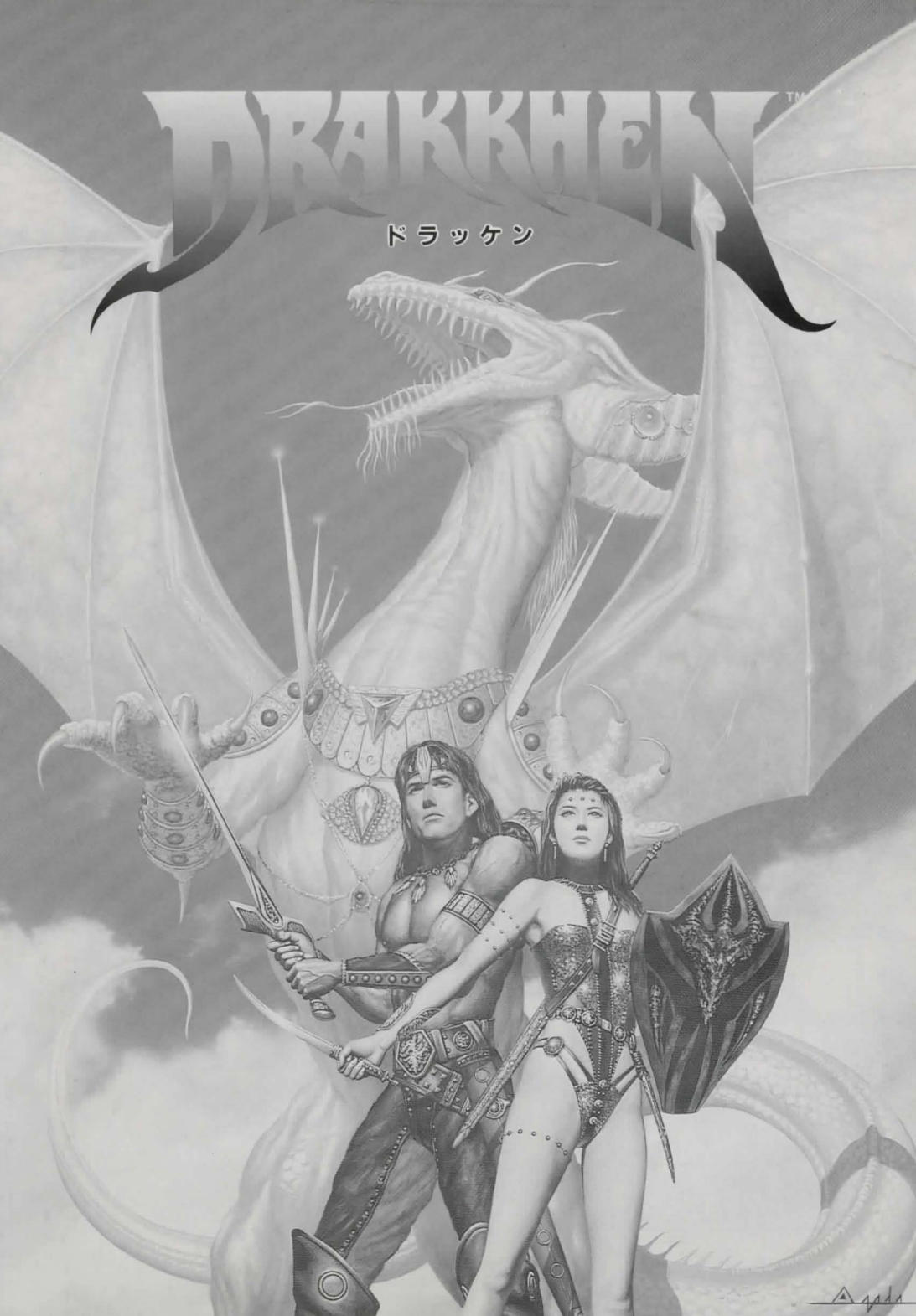


DRAKKHEN™

ドラッケン



テネブレ133年グリフィンの月の10日

武者

何時間続いたであろうか、この世で最後のドラゴンと武者は、お互いに力尽きるまで戦い続けた。熱い血と泥と脂の海で両者は見つめ合った。もう憎悪はない。死力を尽くして戦った相手への畏敬の気持ちが交わされた。武者はドラゴンの額によじのぼり、とどめを刺した。



魔法消失



私は絶対神に仕える大僧正、ウェッセンマイヤール。俗世間から離れ、宮廷の神殿に住まう私が、親友である大魔道士から聞かされた話は、まさに晴天のへきれきであった。魔法が消えた世の中では、魔法で建てられた建造物が崩壊したり、魔法使いを中心に組織された軍隊が、なんでもない盗賊の一味に全滅させられたり、魔法で風を操る風魔術官を乗せた最新鋭の帝国商艦が消息を絶つなど、大混乱の様子である。

アナク・ドラッケン

それは幾度となく太陽に焼かれ
それは幾度となく月光を浴びた
それは光の主
それは影の主
それは宇宙の主
それは父の涙

それは四
それは四
それは二かける四
それは八
それは八
それは一かける八

眠っているのか
それは死の眠り
姿似たるものの吐息より
幻覚が生まれたり

(地を這うものの書より)

ハズル・メクトル “予言”

最後が倒れ、後が途絶えしとき
すべては変わり、変わらぬものなし
高慢と蛮行を
勇気と自賛せる愚人
我が最後の息子を斬殺せん
その日こそ、森羅万象の終焉
理由なき混戦
戻る鞘なき剣
秩序は土くれのごときに価値を失い
風に舞わん

そこに至りて、いかなる希望ありや
アグナイール・ハースト
根源の父
“初源のドラゴン”

「世界は一日や七日にして
創られたものにあらずして
滝のごとく噴きつける火炎によりて
すべての土地に命と、知識と、
権力が吐き散らかされたものなり」
異端者カントレイスの言葉より

「大蛇が大蛇を食い尽くさめかざり
彼はドラゴンにはなれぬ」
古代の格言より

「4つのエレメントが宇宙を構成し
2つの極が4つのエレメントを支配
する8つの原理が全体より派生し
全体は不死身である」

大魔道士
メスラトン

わしは、どこかの大馬鹿者が
ドラゴンを殺す光景を透視し
たんだ。

それが最後
の魔法にな
ろうとは…



あれが、どこか
の大馬鹿者かも
しれんよ

おお、あいつだ！
確かにあいつだ！

私と大魔道士は、皇帝の執務室に呼び出された。案の定、そこには衛兵に囲まれて武者が立っていた。そこで武者は、無礼にも皇帝陛下に向かい、じかに口を開いたのだ。

陛下、自分は
ドラゴンを退
治し……



この者に死刑を
求刑いたします

右に同じく…

死刑だ！
絞首刑に処する

死体は4つに裂き、
野良犬にくれてやれ！

テネブレ133年ドラゴンの月の7日



おや?

行方不明になっていた帝国商艦、ソル・コム1が帰ってきた。どこをどう通ってきたのか、船体はボロボロ。乗組員も随分少ないように感じられた。しかし、港では人々が歓迎の喚声をあげている。ともあれ、戻ってこれてよかった。



あのような一介の風魔法官ごときに、ゴールドガードが……



何かあるぞ

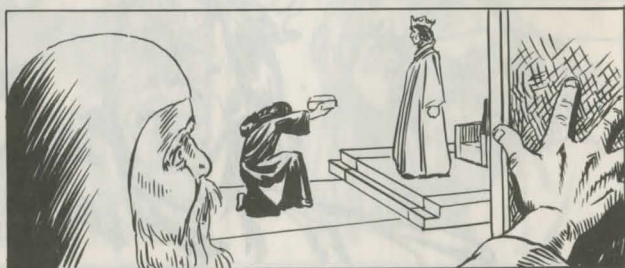
皇帝陛下は何かをご存知に違いない

止まれ!



融通のきかない衛兵ほど、私をイライラさせるものはない

部屋の中では、ソム・コル1の風魔法官が、陛下に何かを手渡しているところだった。航海日誌だ。皇帝陛下じきじきに渡すからには、特別な事が書かれているに違いない。しかも、すごく悪いことだ。風魔法官から簡単に話をお聞きになったのだろう。陛下はいつになく深刻なお顔をなさっていた。



テネブレ133年ドラゴンの月の12日

ドラゴンを殺した武者が処刑された。すべて皇帝陛下のご命令どおりに遂行されたが、武者の肉を与えられた野良犬だけは、陛下のご意志に背き、肉には目もくれなかった。皇帝陛下は、最後のドラゴンが殺されたことが事実として確認されたことと、そして、ソル・コム1の風魔法官からの報告をうけて、具体的な対策に乗り出された。まず、諸国の王たちを呼び寄せ、私と大魔法士を交えてのランドスラード会議を召集された。これは、帝国の最高会議で、7日間、外部との接触を一切絶って行なわれる。そこで私は、初めて、ソル・コム1の航海日誌を読み、驚愕した。諸君の手元にも、航海日誌があるはずだ。読んでみるがいい。



諸君、それでは、帝国で最も強く賢い勇者を4人募り、この作戦を遂行させることとする。

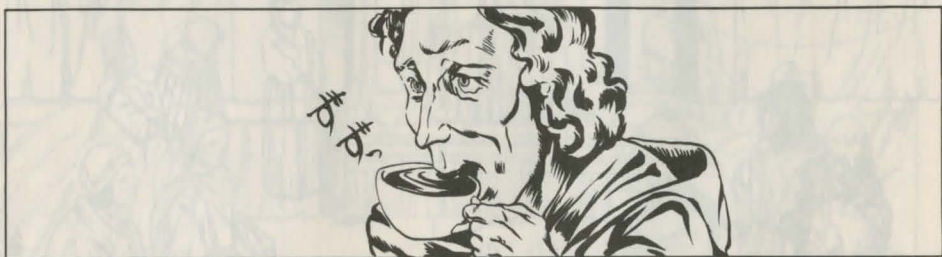
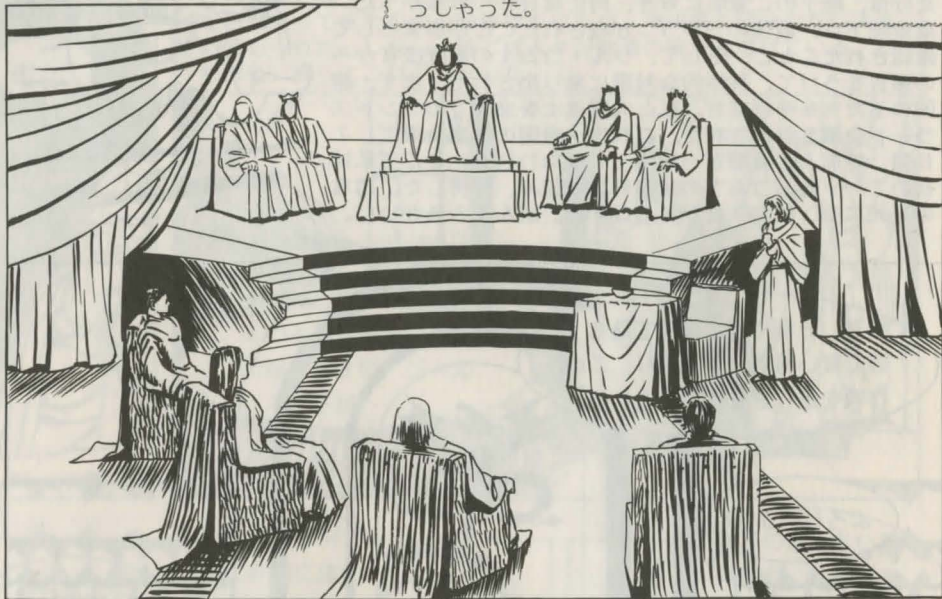
よろしいかな?

陛下、ぜひこの私をメンバーにお加えください!

なぜ、こんな危険な任務に志願してしまったのか、自分でも驚いている。しかし、もっと驚いたことには、だれも私を止めなかったことだ。常日ごろから私のことを良く思っていない連中は、ニコニコしながら私の勇気をほめ讃えてくれた。残る3人の勇者が選ばれ、さっそく宮廷に召集された。

風魔法官の話

私と3人の勇者は、皇帝の執務室に呼び出された。そこには、諸国の王たちも集まっていた。緊張した面持ちで待つことしばし。あの風魔法官が現れた。皇帝陛下は、我々に、彼の話をよく聞くようにとお願いした。



皆様、ご機嫌うるわしゅう。

さて…では航海日誌の先をお話しましょう……

船長が見た城に近付くと、我々はそこで、島の住人に遭遇したのです。それはなんと、恐ろしい顔をしたドラゴンでした。ドラゴンは、いきなり我々に襲いかかってきました。騎士と兵士はとっさに戦闘態勢をとり、我々非戦闘員は物陰に身をひそめました。ドラゴンの襲撃はものすごく、一瞬のうちに全滅かと思ったそのとき、城の門が開いたのです。



助かった、と思いました。城の中の人たちが我々に援軍を出してくれたのだと思ったからです。しかし、城から現われたのは、これまた鎧兜に身を固めたドラゴンたちだったのです。何がなんだかかわからず立ち止まった兵士の首を、ドラゴンたちは大きな剣を振り回して落としていったのです。

それだけではありません。城の窓から翼のあるドラゴンが次々に飛び出して、空からも猛攻撃を加えてきたのです。我々の抵抗もすさまじく、多くのドラゴンを倒しましたが、結局、我々の兵士は全滅させられてしまいました。すると、城の塔のつべんから、3匹のドラゴンが舞い降りてきました。2匹は赤い色をしたドラゴンで、目を見張るほど美しい鎧を身につけていました。そして、もう1匹は、身のたけが6メートルもあろうかという、大きなドラゴンで、体中を宝石で飾っていました。中でも、額につけた大きな宝石はこの世のものとも思えぬ、美しい光を放っていました。どうやら、これが城の主人のようです。主人は、ひとりの人間の遺体をつまみあげると、フンと鼻で笑って投げました。そして彼が手で合図すると、ドラゴンの兵たちは、あろうことか、喚声を上げながら、人間の兵士の遺体を貪り喰いだしたのです。なかには、まだ生きている兵士もいました。なんと、恐ろしい光景でした……

上陸部隊に参加した我々、非戦闘員は、この光景を遠くから眺めていました。

我々は、この場所を早々に引き上げることを決め、一目散に逃げ出したのです。我々は3日間、馬を走らせました。そして、ある村に出たのです。隊の中には病人もいました。そこで、思い切って村に入ることにしたのです。村の住人は、城で見たドラゴンとはずいぶん違っていました。もっと人間に近い感じです。話かけてみて、非常に驚きました。彼らが話している言葉は、私たち魔法使いや僧侶にだけ伝えられている古代魔法言語だったからです。そのため、なんとか話をすることができました。穏やかな村人の歓迎を受け、我々は数日その村に滞在しました。聞くところによると、彼らドラゴン人たちは、古代から続く由緒ある種族なのだそうですが、この村の人々は、そのなかでも最下層の種族なのだそうです。我々はこの村の先に大きな城下町があると教えられ、皇帝陛下のおんために調査をすべきであると思い、村を発ったのです。

町は大変な賑わいでした。非常に大粒の麦に似た穀物や、食用と思われる家畜を乗せた荷車が行き交っていました。特に、目を引いたのは、建物の大きかったです。ドラゴン人たちは、非常に体が大きいため、建物の入り口などは、高さが4メートル以上あります。我々は、酒場を発見し、中に入ってみました。

我々が入ると、店内は一瞬静まりかえりましたが、またすぐに騒がしさを取り戻しました。



我々は巨大サイズのテーブルにつき、食事と飲み物を注文したのですが、出てきたのは黄色い液体に浸された生肉の塊と、緑色のビールでした。食事には手をつけることができませんでした。酒がまわって気分が落ち着くと、仲間の僧侶が、広場で見かけた寺院のようなどころに行ってみようと言いました。止めても無駄であることは、わかっていましたから、好きにさせたのです。僧侶が出ていってからしばらくたって、店に大きなドラゴン人が入ってきました。店の客は、いっせいに立ち上がり、こう呼びました。

「ハック、ハック、ドラクケン！」かなり位の高いドラゴンのおうです。我々も真似をして、ハック、ハックとやっただけですが、うまく言えません。それで、一発で気付かれてしまいました。大きなドラゴン人は、我々のテーブルに腰掛け、我々に質問を浴びせかけてきたのです。彼の目には、知的な好奇心が見てとれました。対談は2時間も続いたでしょうか。やっとながら腰をあげて帰ると、しばらくして僧侶が戻ってきました。そこで我々は店を出ることになりました。しかし、外ではドラゴンの衛兵が待っていて、我々は、宮廷まで同行するように要請されました。

宮廷では、あの恐ろしい惨劇があった城とは正反対の、手厚いもてなしを受けました。豪華な寝室に案内され、そこを自由に使ってよいとの許しを得たのです。気がつくまで、さっきから僧侶がソワソワしています。聞くと、非常に大切な話があるとのこと。それをずっと話したかったのに、なかなか話す機会がなかったのです。私は、居間の大きなソファに腰を下ろし、僧侶の話しを聞くことにしました。それは、こんな内容でした。

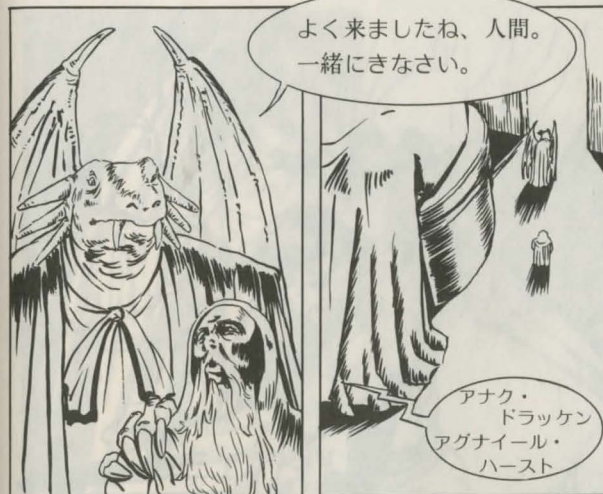
僧侶の話

彼が寺院だと思ったところは、やはり寺院だったようです。入り口を入ると、長い廊下になっていて、香の匂いが漂っていたそうです。



アナク・ドラッケン
アグナイール・ハースト

なんという、やさしい顔だ…。しかし、なぜ8つの涙を流しているのか……



よく来ましたね、人間。一緒にきなさい。

アナク・ドラッケン
アグナイール・ハースト



お掛けなさい。



これから私が話すことは、にわかには信じがたいだろうが、すべて真実だ。

創世の真実を、お前たちに伝えなければならない。

創世の以前は、闇の世界だった。そこで父は、星を創り、それぞれの星に生命を植えられた。そしてこの世界には、爬虫類が栄えた。次に父は、爬虫類から理想の生物をお創りになった。それが我々、ドラッケンだ。ドラッケンは、数十万年の間、この世界を支配した。しかし、選ばれた種族であるドラゴン王族たちは、それに飽き足らず、自分たちが創造主になろうとしたのだ。そうして創られたのが、お前たち人間だ。ところが、ドラゴン王族が眠っているうちに、人間は繁殖し、しだいに横暴さを増してき

たため、父の怒りをかい、罰を与えられてしまった。その罰に耐えられた人間だけが、生き延びた。それでも父は、人間に救いの道を残されたのだ。父は、ドラゴン同様、人間も我が子として愛されていたからだ。その後、ドラゴン王族は、生き残った中から選ばれた人間に、ドラゴンの歴史や魔法を伝え、共に父を讃えるドラゴンと人間が互いに協力しあって豊かな世界を築いたのだ。これが、お前たち人間の僧侶や魔法使いの先祖にあたる。



しかし、このとき排除された人間は、世界の果てに追いやられ、ドラゴンに恨みを募らせていた。彼らは、再びドラゴン王族が眠りにつくのを待って、ドラゴンと人間が築いた世界を襲った。ドラゴン側の人間たちは、ドラゴン王族に助けを求めたが、ドラゴンは目を覚ましてはくれなかった。そのため彼らは、襲撃に遭い、豊かな世界も崩壊してしまった。『ドラゴンに裏切られた!』ドラゴン側の人間たちも、しだいにドラゴンを敵対視するようになってしまった。人間の姿をした神を創り上げ、それを崇めるようにまでなってしまったのだ。ドラゴン王族が目覚めたときは、世界はすっかり人間のものになっていた。まだ人間

は友だちだと信じ込んでいたドラゴンが人間の前に姿を現すと、人間は猛攻撃を加えて追い返してしまった。次第にドラゴンは世界の果てに追いやられ、次々と殺されていった。ドラッケンは、女子供まで、八つ裂きにされ、絶滅させられてしまった。最後のドラゴン王族が殺されるのは時間の問題だった。しかし、そのとき、ひとつのメッセージが叫ばれ、その瞬間に、それまでの世界の運命は凍結されて、新しい時代が開始されることになっていた。

『アナク・ドラッケン・アグナイール・ハースト』

(ドラゴンの栄光の時代! 新世界創世! アナク・ドラッケン!)

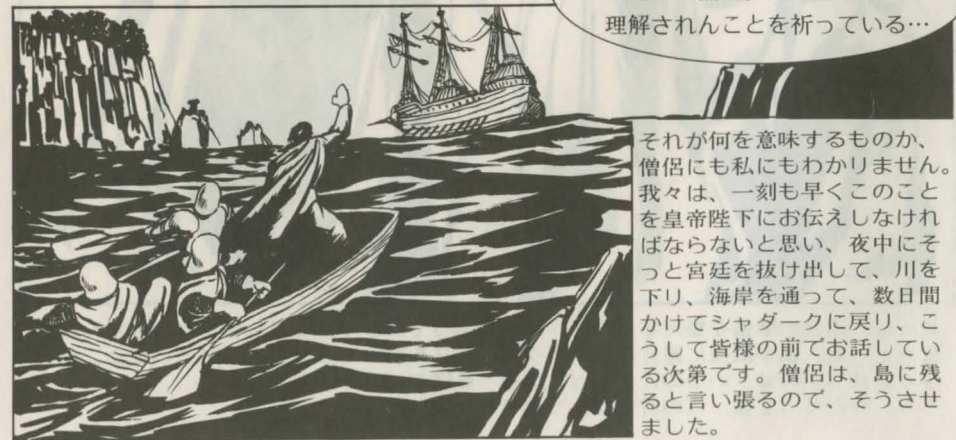
新しい世界はもう始まっている。最後のドラゴン王族が殺された瞬間に、この島が生まれ、ずっと昔に死んだドラッケンが復活したものだ。この島は次第に大きくなり、人間の世界を飲み込む。人間はドラッケンによって虐殺され、滅ぼされる。我々は人間に恨みはない。これは運命なのだ。父のご意志なのだ。



お待ちなさい。ひとつ言っておこう。父は8つの涙を流されたと言われているが、そうではない。流されたのは9つだ。



そのうちのひとつは、人間のための涙だ。この意味を理解されんことを祈っている…



それが何を意味するものか、僧侶にも私にもわかりません。我々は、一刻も早くこのことを皇帝陛下にお伝えしなければならぬと思い、夜中にそっと宮廷を抜け出して、川を下り、海岸を通って、数日間かけてシャダークに戻り、こうして皆様の前でお話している次第です。僧侶は、島に残ると言い張るので、そうさせました。

出発

以上だ、諸君。

この話は、すべて真実であることが、大魔道士の調査で確認されている。諸君の使命は、島で人間の僧侶に会い、第9の涙の謎を解き明かし、人類を滅亡から救うことだ!

諸君にすべてがかかっている!

さあ、急げ!
港に帝国海軍の軍艦が待っている!!



我々は、出発の準備を整えるために、部屋にもどった。私が最後に旅行用のバックパックを使ったのは、いつのことだったろうか。今となっては、人の目を盗んではサ

ボってばかりいる召し使いが、きちんとグリスを塗って保管してくれていたと、信じるほかはない。

ドラクエン™
DRAKKHEN™



DRAKKHEN™ ©1989, 1990 INFOGRAMES PUBLISHED UNDER
LICENSE FROM INFOGRAMES S.A.
INFOGRAMES AND DRAKKHEN ARE TRADEMARKS OF
INFOGRAMES S.A. AND ARE USED WITH PERMISSION. ALL
RIGHTS RESERVED. LICENSED IN CONJUNCTION WITH JPI.

富士通株式会社